

# 立命館大学建設会

発行所  
立命館大学建設会事務局  
〒525-8577  
滋賀県草津市野路東1-1-1  
立命館大学理工学部  
環境都市系事務室内  
平成27年8月

## 第29号

### 会長挨拶

建設会会長  
山崎 系治  
昭和五十年卒



昨年の建設会総会におきまして会長に就任致しました山崎です。どうぞよろしくお願い致します。建設会会員の皆様方におかれましては、平素より建設会の活動にご支援、ご協力をいただき誠に有難うございます。

会長に就任以来、各支部の総会や環境都市系の卒業記念パーティーなどに出席をさせていただきましたが、各支部の活性化に向けた役員の方々の大変なご努力や学系の先生方のご尽力に改めて敬意を表したいと思えます。特に三月に開催された環境都市系三学科の卒業

記念パーティーでは、夢と希望と元気に満ち溢れた若い後輩達を拝見し、四十年前の卒業式の頃を懐かしく思い出しましたが、立命館の卒業生であるという誇りを忘れず仕事に取り組んで欲しいとの話をさせていただきます。

また、理工学部の他学系の同窓会とともに二年間に亘り取り組んで参りました「理工学部BKC移転二十周年記念事業募金」につきましては、建設会会員の皆様方や支部、企業から多くのご支援をいただくことができました。この場をお借りして心から御礼を申し上げ

げます。なお、今回建設会の皆様方からいただいた募金につきましては、環境都市系の人財育成や教育研究の充実などに使われると聞いております。

さて、甚大な被害をもたらした東日本大震災から四年が経過しましたが、その後も、地球温暖化が原因と思われる集中豪雨による浸水被害や地滑り被害、そして、最近頻発する地震に加えて火山の噴火も各地で発生するなど、わが国における自然災害からの復旧と災害防除の取組は喫緊の課題となっております。

自然災害で大変な被害を受けた各地の復旧や防除工事には、国・地方自治体・建設業界等に携わる多くの土木・建築技術者が最前線で取り組んでおります。しかしながら、最近の若い人達は、とりわけ土木系の仕事を敬遠する傾向が

大きくなっていると言われており、建設業界だけでなく全国の自治体においても予定する人数の土木技術職員が確保できず、ある自治体では応募さえなかったという事例も報告されております。このままでは、土木建設業界を支える土木技術者だけでなく、鉄筋工や型枠工などの専門技術者も益々不足し、将来大きな問題になるとさえ言われております。

そういう状況の中、昨年は土木学会創立百周年ということでも、様々な取組が行われましたが、自然災害が多発し、国民の関心が大きくなっている時にこそ、国や自治体、建設業界、土木学会などの産官学が連携し、多くの若者が土木技術者を目指してもらえようという取組（3Kとも5Kともいわれる建設業界の悪印象の払拭やテレビ・SNSなどを活用した日本が

世界に誇る土木工事や土木技術・土木技術者のPRなど）も必要ではないかと思っております。

今年には環境都市系の前身となる立命館高等工科学校の土木科が誕生して七十七年になり、建設会の創立からも来年は七十五周年の節目の年を迎える事になります。八十周年の節目の年に向けて各支部とは勿論の事、学系の先生方ともしっかりと連携を図りながら、若い卒業生から先輩まで、世代を越えた多くの卒業生が参加していただける建設会を目指して取組を進めて参りますので、皆様方のご支援、ご協力を重ねてお願いを申し上げます。

最後に、建設会会員の皆様方のご健勝・ご活躍を心よりご祈念申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

### BKC(びわくきつキャンパス)移転後二十二年目を迎えた学系の近況について

環境都市学系 学系長  
環境システム工学科 教授  
天野 耕二



建設会会員の皆様におかれましては、日頃より環境都市学系教学への熱いご支援と学系同窓会活動活性化に向けた継続的なご尽力に心より感謝申し上げます。また、二〇一二年度より進めて参りました理工学部BKC移転二十周年記念事業では、多くの会員の皆様にご力強くお支えいただいた御陰様により、学系の教育研究環境をより一層充実させることができるとともに、建築都市デザイン学科の環境シSTEM工学科教授として塩見康博先生が講師から昇任される

この春、学系はBKC移転後二十二年目の新学期を迎えました。学系教員の異動につきましては、環境シSTEM工学科教授の岡本享久先生、建築都市デザイン学科講師の源城かほり先生、同学科助教授の向坊恭介先生、同学科助手の藤井健史先生が退職され、新たに環境シSTEM工学科准教授として塩見康博先生が講師から昇任される

として引き続き学系教学の重責を担っていただいております。総勢四十名を超える学系の教員数は、一九九四年BKC移転時の二倍近くになります。移転当時は土木工学科(現在の都市システム工学科)に加えて新設された環境シSTEM工学科の二学科で建設環境系と呼ばれていましたが、その後、二〇〇四年に建築都市デザイン学科が発足して教育研究領域を拡大させながら環境都市系三学科として今日に至っております。BKCも学部新設などで建物が毎年

期もありましたが、昨年の会報でもお知らせした通り、二〇一四年四月よりトリシアという新棟に学系の教員研究室と学生研究室が集結しております。BKCの建物にはカタカナの長い名称から略称で呼ばれるものが多いのですが、学系の若手教員を中心に「略しようがない短い表記でかつ環境都市学系の建物としてのポリシーを込めて」トリシアは命名されました。立命館の学園通信ホームページに詳しく紹介されていますが、アルファベット表記TRICEAのTRIは三位一体(教員・職員・学生あるいは産・官・学)、CEAは交流・実験・学びの英語表記の頭文字などを組み合わせています。(裏読みとして、土木・環境・建築の英語表記の頭文字CEAという見方もあるようですが)

衣笠キャンパスの校舎を知る教員が少なくなるとともに、建設会支部総会などでBKC育ちの卒業生と再会する機会も増えてきました。BKC移転当時に一九〇万人近くだった十八歳人口が現在は二〇万人を切り、「ゆとり世代」や「さとり世代」といった昨今の若者氣質を耳にすることも多いかと思えます。いつの時代も年配者から見た若者の頼りなさはたえて尽きない心配事ですが、いまの学生はこの時代ならではの様式でしっかりと育っているようです。建設会会員の皆様にも引き続きあたたかく見守っていただきながら、「立命館に入ってよかった」、「環境都市学系でよかった」と言って成長していく若者たちを新世代の建設会会員として送り出していきたい所存でございます。今後とも環境都市学系をどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



# 会員の声

## 岐阜県建設会活動と岐阜観光



岐阜県建設会  
加藤龍雄  
昭和四十四年卒

岐阜県は海なし八県の一つで、周りを七県と接して、「山紫水明の地岐阜」と表現されています。東海道線草津駅から岐阜駅まで、普通電車で一時間三十分と、BKCに通学可能な時間距離にあります。

岐阜市のランドマーク標高三二九mを誇る金華山。山頂の岐阜城から西には「美濃を制するものは天下を制する」と信長公が天下統一を夢見た濃尾平野が広がり、夜には、一三〇〇年以上にわたり守り続けられてきた、「ぎふ長良川の鵜飼」の鵜舟の狩下りや六艘の鵜舟が川幅いっぱいになり浅瀬に鮎を追い込む総がらみの美しさをご覧ください。

岐阜県建設会は、設立九年目を迎えるとしています。立命館大学建設会会報にも継続して、岐阜県建設会から投稿されてきました。投稿の、今年古希を迎える私にまで、投稿のお鉢がまわってききました。平成二十六年年度岐阜県建設会の活動報告と岐阜県の観光を案内して、責任を果たしたいと思えます。平成二十六年年度の主な活動は、総会に、建設会会長、二名の先生、三名の支部建設会会長を来賓にお迎えし、山田左知子さんのシャソンを聴きながら懇親を深めました。また、現場研修として岐阜県可児市にある名古屋鉄道名鉄資料館を見学しました。同社の創業百周年を記念して開設された施設だけあって、展示品が充実していて、鉄道ファンも多数来館していました。

昨今、B級グルメやゆるキャラブームが静かになったと思ったら、「うどん県」を名乗る香川県、「スタバないけど砂場はある」鳥取県、「近江県」いや「琵琶湖県」に名称変更したらどうかの滋賀県など、地方は話題作りに一生懸命です。一方、岐阜県観光課の職員は「岐阜県がどこにあるのかわからない人がいる」と、テレビで嘆いていました。そこで会報の紙面をお借りして、岐阜県の観光を案内させていただきます。

岐阜県は海なし八県の一つで、周りを七県と接して、「山紫水明の地岐阜」と表現されています。東海道線草津駅から岐阜駅まで、普通電車で一時間三十分と、BKCに通学可能な時間距離にあります。岐阜市のランドマーク標高三二九mを誇る金華山。山頂の岐阜城から西には「美濃を制するものは天下を制する」と信長公が天下統一を夢見た濃尾平野が広がり、夜には、一三〇〇年以上にわたり守り続けられてきた、「ぎふ長良川の鵜飼」の鵜舟の狩下りや六艘の鵜舟が川幅いっぱいになり浅瀬に鮎を追い込む総がらみの美しさをご覧ください。



平成26年度 立命館大学岐阜県建設会 総会

まだまだ紹介しきれない観光地がたくさんありますがここまでとします。

京都へはもう何度も行かれたことでしょう、岐阜県へ来る機会は少ないかと思いますが、BKCから日帰りも可能です。一度いらしてみてください。お待ちしております。

## 母なる土木を目指して若者への期待



京都支部副支部長  
村山 稔  
昭和四十九年卒

ヒトは実にアンビバレント(両義性、両面価値)な存在である、という認識が一般化されたのはつい近時のことである。男は男らしく、女は女らしく。それを我々は当たり前だと思っていた。だが、この男/女らしくは富国強兵の申し子だという。この世に、完全無欠の人がいないのと同様、悪の権化もまたない。古来、孟子が性善説を、荀子が性悪説(利己的欲望)を首唱した

が、実際のところ、人の本性にいずれかはなく、入り交じっているのが実態である。グラデーション——白でもなく、黒でもない。真は階調(漸次的変化)にある。だから、この世は常に「不生不滅・不垢不浄・不増不減」(般若心経)なのである。ずいぶん長い前置きになった。筆者が言いたいことは、我々の土木もまたしかりであるということだ。「硬派」と暗喩される土木のイメージも一度は疑ってみる。問いを立ててみる。そういうことである。理由のひとつは社会がずいぶん変わってきたことにある。グローバル化や少子高齢の社会が現に今、様々な問題を引き起こしている。二つ目は土木そのものの軸足が移行してきたこと。言わずもがな、建設から管理、運営への変遷である。そして、三つ目は何と云っても人々の見る目が変わってきたこと。経済成長を下支えし、量的拡大に躍りだった頃、土木は装ってで硬派が期待だった。映画『黒部の太陽』(一九六八年、日活)は日ごとに、日の目を見る大規模構造物の狼煙(のろし)だった。理工系ブームが巻き起こったのもこの時代。ここかしこの農村から、民族移動を思わせる人々が都市へ流れ、モノづくりのよき働き手となった。ひとつの時代には、その時代を支配する考え方や営為がある。トクヴィル(フランスの哲学者、一八〇五—一八五九)はそう言ったが、土木にあっては他ならぬ、男らしさ、女らしさがそれに当る。その男らしさ、女らしさが、あらぬ男らしさを演じ、土木の品位を貶めたのも事実である。

時は流れ、誰しもがもう経済成長は見込めなれないと思っている。成長を促す素地がないのだから、当たり前である。結局、土木に対する人々の感情も大きく変わった。インフラの本来の意味に照準が合わされてきたのである。土木の持つ根源的役割とその任務。耐震化や長寿命化はもとより、既設インフラのスマート化や自治向上に向けた土木技術の内在化など、今が智慧の絞り時になっている。ところで、社会の混沌時に現れる特質のひとつに、社会的純化がある。ムダは唾棄され、厳格な管理社会が大手を振る。格差は当然視され、若者や弱者に襲いかかる。抜き差しならぬ社会になっているのだ。一方、社会にはある種の浄化作用(カタルシス)がある。諸事淘汰され、最適化に向かう。労働のブラック化に抗する動き(帰農や小商など)が全国のあちこちで始まっているのは何よりの証左であろう。土木と同様、もう硬派や男らしさを自認している時ではない。あるべき土木の模索は焦眉の課題となっている。

しばし目をつぶり、土木の深遠に思いを馳せてみたい。すると、ひとつの「像」が眼に浮かんでこないだろうか。土木の持つ悠久やぬくもりが……。畢竟、土木とは慈しみであり、やさしさであり、換言すれば、母なるものの共鏡でもあるのだ。となると、我々が会得してきた土木は全体像のほんの一部分でしかなかったのではないか。あるべき姿への途上だったのではないか。そう考えると、一見無慈悲な構造物学や土質工学、水理学も何だか温かく感じられる。自然の猛威と対峙し、日々の暮らしに利便と安全を供する。まるで母親が我が子を包み込む羊水に似ている。大地に根を張り、世紀をまたぐほど長きに、地域や人々に安寧をもたらす土木。母の存在である。歴史を俯瞰すると、先史、ギリシャ、エジプト、インド、中央アジアには母系社会があったという。やがて階級制度が始まると「男社会」となり、それが今日まで続く。挙げ句、男社会は絶えない紛争を幾度となく繰り返してきた。スイスの人類学者バツハオーフェン(一八一五—一八八七)は、こうした人類史を喝破し、母権社会への移行が社会の平安だと説く。ならば、こんなことが言えるのではないか。土木は慈母であり、時に厳父であればよい、と。アンビバレントな度合いは、時代や場所、あるいはインフラによって違う。どれが正しいかなどという解はない。それでよいのである。土木の既成概念からの脱皮——今日、様々な指標が示す混沌は、実は予定されていたものなのかもしれない。ならば、座して待つことは愚行に等しい。好機到来。苦勞は先刻承知だ。物ともしない気概で事に当たる。歴史を実感する時が来たのである。いつの世も時代を切り拓くのは若者たちだ。彼ら/彼女らには執着も、こだわりも、そして恐れもない。その若者に土木の未来を託す。もちろん我々も心を一にする。世に、これほどの冥利はない。これをして、土木のグラデーションと呼ぶのなら、そういうことなのかもしれない。

## 愛知県建設会と仲間づくり



愛知県建設会会長  
松下博克  
昭和五十一年卒

建設会愛知県支部愛知県衣笠会は、理工学部があった衣笠の学舎を想い名付けられ長年にわたり愛知県の建設業界が活気づくように活動をしてきました。先人の先輩方が築き上げてきた会も、二十年前に学部が草津キャンパスに移り次第に愛知県衣笠会の存在も薄れてゆくように感じられ土木工学科から変わった新しい学科を卒業された若い人々には愛知県衣笠会の存在すら知られていないのが現状です。今後、会の活性化をめざし愛知県衣笠会の名前を愛知県建





そのような中で、建設業に携わる卒業生の皆さんが愛知県衣笠会を通じて交流ができればと思っております。会も今後新たな気持ちで活動を進めていきますので、愛知県で活躍される卒業生の皆様のご参加をお待ちしています。

### エッセイ：アウトローが今



建立会副会長  
西村龍一  
昭和五十五年卒

昭和四十六年春、四国松山を後にし、京都に上京してから四十五年目の夏を迎えようとしている。折角の紙面、この四十数年を振り返ってみたいと思う。ただし、あくまでも独り言とお断りして。

二年後、京都にこだわった私は、吉田山に振られて衣笠山の麓に通うこととなった。もとより、熱心に授業に出席しようなどという気はなかったが、運動がてら測量学実習だけには顔を出した。思えば、これが最初の転機となった気がする。

グループでの活動であるため、この人たちのつきあいが立命における交流の始まりとなった。その後、多くの同期たちに友達の輪(?)が広がり、人と話すことが好きな私は、彼らの下宿にもよくちよくおしかけた。まあ、先方には迷惑なことだったろう。

相変わらず、あまり授業に出席もせず、夜な夜な木屋町あたりを散策しては「サラブレッドの究極の走行能力」に関する研究、あるいは「小鉄球への打撃に対する挙動」の研究、はたまた「中国語の極めて部分的利用」について、四人集っては討論していた。結構気楽なものである。

三回生も終わる頃、勝手に登録してくれた友人のおかげで所属させていただいたのが、水工研(大同卒研室)であった。二番目の転機である。

それまで付き合ったことのない違った違うタイプの友人たちと交

### 佐賀関漁港



大分県支部  
後藤靖博  
平成十二年卒

私は土木工学科卒業後、大分県の技術公務員として働き、今年で十五年目になります。これまで、道路、都市計画、河川、砂防と幅広く担当してきましたが、昨年度から、漁港を担当することになり、今年二年目を迎えています。

さて、大分県内には百十の漁港(全国第七位)がありますが、そのうち大分県で十二の漁港を管理しています。今回、私が担当している佐賀関漁港について、お話しします。

最初に、佐賀関といえば、皆様ご存じ? 関あじ、関さばが有名ですが、少しだけ紹介させていただきます。まず、関あじ、関さばとは、佐賀関漁協の組合員が一本釣りで釣ったマアジ、マサバのことを言います。漁場である佐賀関沖は、「速吸の瀬戸」と呼ばれる潮流の速い水域となっており、この特殊な潮流とそれがもたらす豊富な餌が、関あじや関さばのおいしさを生み出しています。また、重さを量ることなく魚を見て大きさが重さを判断する「面買い(つらがい)」といった売買方法や、一旦港の網いけすで落ち着かせ、出荷の際に行う「活け締め」という処理など、各工程で魚にストレスをかけず、魚体に傷を付けず、鮮度が落ちないように工夫を行っています。

このように関あじ、関さばの獲れる佐賀関漁港では、現在、沖の防波堤において地震津波対策工事を行っています。地震津波対策とは、東日本大震災を踏まえた対策であり、防波堤の設計に用いる「設計津波」に対して防波堤に求められる機能を維持し、「設計津波」を超える規模の津波が来襲する場合にあっては、防波堤の求められる機能

能が可能な限り維持されるよう津波に対して倒壊しにくい「粘り強い構造」を目指す対策です。具体的な工事の内容としては、既設防波堤の港内側の捨石をかき上げし、その表面を被覆石及び被覆ブロックで覆う工事になります。今年度、沖の防波堤の工事は完了し、今後は、残りの防波堤や物揚場等について、地震津波対策を検討していく予定です。

就職して十五年目になります。ポツーン、陸測・海測、沖波など、海の工事ならではの用語や、ライフジャケットを装着しての船による現場立会等、漁港での経験はとも新鮮で、就職間もない頃を思い出します。この気持ち(初心)を忘れたらいけないと思う今日この頃です。

最後に、この機会をお借りして、大分県在住あるいはご縁のある皆様にお知らせします。大分支部は現在活動休止中であり、今後の活動再開に向けて、ともに活動に取り組んでいただける方々の連絡先を把握したいと考えています。よろしければ、次の連絡先まで連絡いただければ幸いです。

(連絡先) 大分県支部 事務局  
浅井 誠人(平成十二年卒)  
E-mail: asai-masato19770629@oct-net.ne.jp  
とりとめの話で失礼しました。最後まで読んでくださり、ありがとうございました。ご縁がなくて、チャレンジと苦難があつて今がある



建立会  
平田洋子  
平成十四年卒

私が修士二回生の平成十五年、時代は就職氷河期でした。元々公務員志望でしたが試験は不合格、その後受け続けた企業も不合格で、修了間際によく指導教授、村橋先生の推薦を頂いて建設コンサルタントに採用して頂きました。その会社は、修士一回生の夏休み

にインターンシップに行った会社でした。その会社は良いなあと思いつつ採用は無いと聞いていたのが就職先の視野に入っていませんでした。

そのような会社に入社して、道路交通の業務を担当し、二年は楽しく働いていました。しかし、入社三年目、会社の受注する業務が激減して人員が減少し、画像をワードに貼り付けるといった単純作業も私の仕事となり、面白くないなと思うこともありました。そのような中で、交通ミクロシミュレーションを習得する機会があり、某社から少額の業務を頂き、私が担当させて頂きました。そこで担当のI氏と知り合い、技術士受験の指導までさせて頂きました。

そのI氏が面白い人がいるから紹介してあげる、と紹介してくださったのが、今所属している会社のK氏でした。K氏は私が仕事でお世話になっている方と同期で仲が良いことが判明し、その後何度か一緒に飲みに行かせて頂きました。その方々やお聞きする仕事の話に魅力を感じ、技術士取得後に今所属している会社へ転職しました。ただし、契約社員として、です。

技術士を取得していたので仕事に慣れたら正社員に、とお聞きしていたのですが、あまりにも私のスキルがあらゆる面で求められるレベルに達しておらず、業務が減少した時期とも重なり、正社員になるまでに四年半かかりました。

話は飛んで平成二十六年、修士一回生の時にまちづくりワークショップで知り合った他大学の仲間と十年ぶりに再会し、MBA(経営学修士)のことを教えて頂き、十月から通学しています。土木だけでなく経営の知識(ビジネススキル)を体系的に習得すれば、「この業界でどうやって生きていこうか」と長年考えている問いの答えが見つかるかもしれないという希望を抱きました。先日、MBA本科の入試を受けて合格通知を頂きました。来年4月に入学することになり、どのような景色が見えるのか楽しみです。

振り返ると大学の時の教授や仲



間、学問や仕事等のご縁があつて、インターンシップや未経験の道路交通もやってみようと思うチャレンジがあり、面白くない仕事や契約社員といった苦難を経て、今があります。大学は「人生の可能性」を拓けるものだと感じています。「人生の可能性」は何もなくても、ただ勉強だけ頑張っていれば拓けるものではないかもしれません。学びとご縁を大切に活かしてチャレンジし、苦難を越えて行くところに可能性は拓がっていくと感じます。ハッピーな時期があれば苦難な時期もあるもので、ズーッとハッピーなままでも苦難が無い人生を送れることは、無いと思います。今、苦難の中にいる人も、どうしているかわからなくてモヤモヤしている人も、「ここを越えたら新しい景色が見える！」と信じ、それを楽しみに、負けずに、前進していつか頂きたいと思えます。

## コンクリートをツールとする持続発展教育の成果



理工学部  
特任教授  
岡本亨久  
(環境システム工学科・  
旧環境マテリアル研究室)

二〇〇七年から二〇一五年までの八年間、立命館大学・理工学部・環境システム工学科・環境マテリアル研究室では、環境と開発の関係性に着目し、持続可能な社会を目指す取り組みを紹介する実践的な環境教育を実施してきました。研究テーマでは、立命館大学の教育方針である「多様性」を活かし、「環境マテリアル(主として、セメント系硬化体)」を中心に「構造(コンクリート構造のみならず木造古民家再生も)、教育、疲労、新規材料開発(コンクリート製薬器など)、デザイン、超高強度、ポーラス(多孔性、透水性)」の分野に渡りました。

また、ほぼ毎年草津市立玉川中学校にてコンクリートと環境に関する出張授業を実施しました。授業の教材として、七分野に関するテーマから選択し、総計七百名近くの中

学生・教員を対象に実験を含む授業を実施し、各授業において独自のアンケート調査を行い、効果の検証や環境への意識調査を行いました。これらの環境マテリアルを学んだ後に、適用した実構造物を披露する授業はコンクリートの常識を超える印象を中学生に与えました。これからは、将来につながる持続発展教育・Education for Sustainable Development(以下・ESD)を目指してまいります。

このESDの見地から、立命館大学・環境マテリアル研究室の八年間を振り返ってみます。

卒論生全員に異なるテーマを与え、研究のための研究を避け、研究レベル維持を目的に、可能な限り企業とコンタクトを持ちました。卒論生(修論生)は、企業関係者との定期的な打ち合わせ、プレゼンテーションさらには懇親会を通じて、「研究・開発の流れとビジネス性の有無」「研究遂行に関する責任感」さらには「報告書関連の約束厳守」を肌で学びました。国際会議にも院生を中心に毎年派遣しました。全国規模のコンテストにも果敢に挑戦し、超高強度繊維補強コンクリート製の楽器(トランペットとクラリネット)が「二〇一二年全国手作り楽器コンテスト」で最優秀賞を獲得できました。私立大学での研究室運営は「教授(准教授)一人による『研究・教育』を商材とする個人商店」です。よって、環境マテリアル研究室では、教員への研究支援を担当する学内・事務系関係者(立命館大学における「リサーチオフィス」と常態一体となつて、企業との共同研究の調整と外部研究資金の獲得体制作りをしてきました。同時に、「研究・教育」の重層化と高度化を、六名の客員教授(民間企業所属)と二名の客員研究員(立命館大学・土木系OB)の方々とコラボにより図りました。研究室所属の秘書により、学内の見学会旅費に関する補助制度を最大限に利用できたことは、研究室のフットワークを軽快にしました。この八年間で、対外的に二十社近い企業と共同研究、百編以上の論文の対外公表さらには六件の特許出願も実現で

き、今なお継続しています。毎年所属する二十名前後の卒論生および修論(博士)生は、これらの環境の中から「交渉力」「独創力」「企画力」「協調力」および「実行力」を身につけ、就職後も活かしています。これらのESDの総括として、二〇一五年七月四日(土)に京都市内で、私が大学に勤務した二十三年間で一緒に卒論および(あるいは)修論に携わった広島大学(一九七五年〜一九八二年)、東京工業大学(一九八二〜一九九〇)そして立命館大学(二〇〇七〜二〇一五)の卒業生約五十名が一堂に会し、退職祝賀会を企画してくれています。私なりのESD教育の成果を楽しみにしている日々です。

## 着任のご挨拶



建築都市デザイン  
学科 助手  
遠藤直久

今春より、建築都市デザイン学科に着任いたしました遠藤直久と申します。

専門分野は建築の設計・施工で、京都を中心に住宅、店舗の設計及び施工を中心に活動してきました。建築は専門的で複雑な住まいを得ようとする方々、これからお店を構え意気揚々と活動しようとする方々、自らが建築を創りあげたと実感し満足して頂くよう手助けする立場として意識し活動してきました。

私は立命館大学の卒業生で、一九九五年に理工学部土木工学(現都市システム工学科)科に入学し、大学院、修士課程に進み建築設計過程に関する研究を行いました。入学当時、理工学部がびわこ・くさつキャンパス開設により移転されてまだ二年目だったという中で現在の風景とは全く違うものでしたが、新しいキャンパスに意気揚々と通っていた当時のことが思い出されます。しかし約二十年たった今、劇的に大学の容貌は様変わりし、全てにおいてレベルが上がっていることを感じ、

とても誇らしく羨ましく思っています。

在学中には住宅メーカーなどで実施施工設計などのアルバイトに従事しながら、正課で学ぶという充実した日々を過ごし、モノづくり・建築の実際の世界も見ながら学ぶということは義務教育にはない積極的で有用な経験と学習が出来たと思います。また修士課程での研究は自身を深める素晴らしい知識となり、いまでもとても有意義なものとして身につけています。

卒業後、建築・内装施工会社に勤務し施工監理の立場を取りながら、関係デザイン事務所、設計事務所などで外部スタッフとして設計デザイン業務にも従事することも多く、プロジェクトによっては意匠設計担当から現場監督まで一貫して携わることもあり、建築に対して強く、深く関わることで机上では得られない視点を得ることが出来ました。

その後、フリーランスとして活動した中で、世界遺産登録された島根県の石見銀山から温泉津港で民家改修や工場建物のリノベーションプロジェクトがあり、それは現地で設計デザインを行いながら、自ら土壁を練り、木造作したり、地元職人との協力、また施設の運営計画まで関わるなど、皆でモノづくりに関わり、創り上げていくプロジェクトでした。その中で強く感じたのは建築やモノを作るのは人。それらを使うのも人。それらを感じるのも人。人との関わり、コミュニケーションはより良いものづくりに必要不可欠で大切なモノだと学びました。

十数年、立命館大学を離れたがゆえに気付かされましたが、この大学の柔軟な校風と充実した環境は学ぶ場としてとても素晴らしい。このような場に帰ってこれたことはとても光栄で、自分自身を高められる機会を頂いたことに心躍らせています。この建築都市デザイン学科で技術的な面はもちろんのこと、純粋に建築というモノづくりの素晴らしさ、目標を持って進み学ぶことの充実感、人としてコミュニケーションの大切さを自分の経験から少しでも学生たちに伝えることが責務だと考えています。

## 立命館大学技術士会からのお知らせ

- ★同窓の技術士および技術士資格にチャレンジされる方は、当会へご連絡ください。
- ①技術士ネットワークの拡大と同窓・後輩支援としての情報発信を行います。
- ②技術士資格挑戦者への試験対策支援を実施中です。

★立命館大学技術士会は、電子書籍『土木! この素敵な世界』を、Amazon Kindleストアで平成27年7月末に出版予定です。乞うご期待!

平成27(2015)年7月 立命館大学技術士会幹事会  
事務局連絡先: 企画・窓口担当 E-Mail: rits.kikaku.mado@gmail.com  
技術士会ホームページ (http://alumni.ritsumei.jp/gijutsusikai/)

### 事務局より

### お知らせ

#### ▶名簿お取扱いについて

名簿は、会員の皆様の大切な個人情報に掲載しております。名簿をお持ちの会員様は、その保管およびお取扱いには十分ご注意ください(転売厳禁)。なお、ご不要になった名簿につきましては、お手数ですが焼却あるいはシュレッダー処分をしていただけますようお願い致します。

#### ■会員登録データ

立命館建設会会員の皆様の名簿を隔年発行しておりますが、そのもとになるデータベースは、皆様からのお申し出に応じて適宜更新しております。このデータベースは、年会報の送付、総会などの各種案内、また、各支部からの連絡、会費請求の事務などに利用しております。

今回送付いたしました年会報に同封されている「会員登録データ」をご確認いただき、修正や変更がございましたら8月末日までに建設会事務局までご連絡下さい。

また、「平成26年度会員名簿(2014.12発行)」は、会費を納入いただいている会員を対象に送付させていただきました。名簿ご希望の方は、同封の振込用紙にて2年分の会費(6,000円)を納入いただきますと、入金確認が出来次第名簿を送付させていただきます。

#### ■建設会年会費ご納入のお願い

立命館大学建設会は皆様の年会費で運営されています。  
2015年度会費のご納入をお願い致します(年会費:3,000円)。

また、会費ご納入につきましては「郵便局の自動振替システム」をご利用いただくこともできます。お気軽に建設会事務局までお問い合わせ下さい。

なお、銀行からのお振込も可能です(ゆうちょ銀行109(イチゼロキュウ)支店、当座0000884)。お振込の際、お手数ですが氏名の前に10桁のお問合せ番号をご記入いただくか、お名前・お問合せ番号・お振込日を下記アドレスまでご連絡下さい(振込手数料は申し訳ございませんが、ご負担願います)。

※なお、8月8日~16日まで、大学一斉休暇となります。何とぞご了承下さい。

## 建設会事務局

〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1  
立命館大学理工学部環境都市系事務室内(担当:山元)  
TEL: 077-561-4911 FAX: 077-561-2667

http://www.ritsumei.ac.jp/se/rv/ob.html  
E-mail: kenstkai@st.ritsumei.ac.jp  
会費払込郵便振替口座: 02 大阪 01080-1-884